

文化財と技術 第9号

2019年2月28日 印刷

2019年3月1日 発行

編集	鈴木 勉
発行	特定非営利活動法人 工芸文化研究所 所長 鈴木 勉
発行所	特定非営利活動法人 工芸文化研究所 所長 鈴木 勉 東京都台東区根岸5-9-19 (〒110-0003)
印刷	千葉刑務所 千葉県千葉市若葉区貝塚町192 (〒264-8585)

『文化財と技術』

第9号

- 第一部 古代日本列島のものづくり
- ＜環頭大刀＞
 上梶 武 岡山県総社市こうもり塚古墳出土の単鳳環頭大刀
 金字大 巡回式単龍環頭大刀の新例とその評価
- ＜三角縁神獸鏡＞
 鈴木 勉 三角縁神獸鏡の系譜論と製作地論から型式学を検証する
 鈴木 勉 岡村・光武氏らによる金石学的三角縁神獸鏡論について
- ＜鉄の加工技術＞
 黒木英憲 弥生時代の日本に特有で表面に長い溝（＝樋）のある
 戈（＝銚）すなわち「有樋鉄戈」の製法について
 瀧瀬芳之 日本列島内出土象嵌遺物集成（刀剣・銚・刀子編）
 鈴木 勉 線刻鉄刀と象嵌技術
 ー移動型渡来系工人ネットワークの手掛かりー
- 第二部 古代朝鮮半島のものづくり
- 李鮮明・南宮丞 扶餘陵山里寺址出土鍍金細工遺物の製作技術研究
 鈴木 勉 たがねの切れ味から見える百濟王興寺金銅舍利銘の製作背景
 鈴木勉・金跳咏 新たに発見した三国時代の彫金技術と
 「はがねの熱処理技術」の関係
- 第三部 古文化財学
- 河野一隆 装飾古墳からみた平福装飾陶棺の図像学的検討
 塩屋公寛 考古資料のデジタル化と課題について
 鈴木 勉 流通古文化財の闇
 ー金印・誕生時空論と福岡市博購入印章の調査ー
- 黒木英憲 提言：考古学研究者と金属に関わる
 多くの科学技術者の協力を目指して
- 第四部 復元研究
- 比佐 陽一郎 藤ノ木古墳出土耳環の復元製作について

三角縁神獣鏡の系譜論と製作地論から型式学を検証する

鈴木 勉

1. ヒトの系譜と生誕地

- (1) ヒトの場合
- (2) 考古学の場合

2. 製作地に辿り着けない三角縁神獣鏡系譜論

- (1) 富岡謙蔵氏・小林行雄氏の系譜論と網干善教氏の批判
- (2) 後藤守一氏の系譜論批判
- (3) 森浩一氏の分布論、王仲殊氏の分布論と系譜論
- (4) 福永伸哉氏・森下章司氏、車崎正彦氏の三角縁神獣鏡系譜論

3. 製作地論

- (1) 近藤喬一氏と岡村秀典氏の説にみる製作地論の重要性
- (2) 新井宏氏と鈴木勉の製作地論

4. 型式学の運用方法に対する疑問

- (1) 考古学は型式学か？
- (2) 鏡研究者と一般考古学者の認識の違い

1. ヒトの系譜と生誕地

(1) ヒトの場合

「あなたのご出身はどちらですか？」との問いかけに対して、ある人は、「父親は奈良市の田原本出身で母親の実家は京都の平安神宮の裏手にある。」と答え、その隣に居た人は、「おやじの父親は中国の徐州で生まれて日本へ来たと聞いているし、おやじの母親は、洛陽の近くの出だそう。おやじは、日本の学校を出ているのだけれど生まれたのは中国か日本かどっちだったかな？ 家へ帰って聞いてみよう。おふくろは九州の糟屋で生まれたと聞いてるよ。」と答えた。そして最後に「私は東京でうまれたんだ。」と付け加えた。これを聞いた人は「もつともだ」とか「あれっ？ 何かずれてるな」と思うだろう。

「ご出身はどちら？」という日本語には、実は彼の系譜的な答えを聞きたい時と、「彼の生まれた処」を聞きたい場合がある。例えば私の場合は、「私の父は横須賀の生まれで鈴木の家で養子にきたんだ。父方の祖父母はともに横須賀生まれで、先祖代々横須賀だそう。母は東京で生まれたと聞いている。母方の祖父は三浦で生まれて東京へ出て、能登半島鶴川出身の祖母と恋愛結婚したそう。」ここまでの話は全て系譜論で語られていて、一向に私がどこで生まれたかは分からない。実は私が生まれたのは、「横須賀の実家のあの八畳間」なのだ。これでお分かりのように、系譜論をいくら進めても私が生まれた場所が出てこない。つまり「系譜論」では私の生誕地（製作地）は永遠に分からない。

ここ百年余りの日本の考古学者たちは、系譜論を積み重ねると製作地が分かると信じていたようだ。人間の系譜と生誕地（製作地）は全く別の問題であることに気付かなかった。三角縁神獸鏡研究の分野では、「系譜は？」という問いと「製作地は？」との問いを混同したまま 100 年余の時間を過ごしてしまったようだ。そのあたりについて少し紹介しよう。

(2) 考古学の場合

実は、古代日本に存在していた鏡は、その製作地が中国本土であるにせよ日本列島内であるにせよ、その系譜を論じると、つまり、文化の元を辿ると全ての鏡の元は中国本土ということになってしまう。

そもそも系譜論は、型式学と強く結びついている。考古学で行われる系譜論は、型式学的系譜論と言われる所以である。近年は、「考古学とは型式学だ」などと発言する人にあちこちで遭遇する。その発言を聞いた私は「えっ？」と言葉に詰まってしまう。型式学教の信者ではないのかと耳を疑ってしまう。型式学が考古学のほんの一部に過ぎないことは、藤本強氏が詳しく述べている¹。参考にしていきたい。

三角縁神獸鏡研究の方法は、現代の日本考古学の基本となった学問的方法である。その三角縁神獸鏡研究のほとんどが型式学的系譜論で語られてきた。だから製作地は一向に定まることがなかった。いま古代史研究者は型式学の功罪について議論しなければならない、と私は思う。

2. 製作地に辿り着けない三角縁神獸鏡系譜論

(1) 富岡謙蔵氏・小林行雄氏の系譜論と網干善教氏の批判

系譜論と製作地論の混同は、富岡謙蔵氏が生きていた時代から行われていたようだ。

富岡氏は、

1 藤本強 1994 「研究方法のいろいろ」『増補 考古学を考える』雄山閣

- ① 陳氏、張氏など中国系工人の名が銘文中にある
- ② 銘文に「銅出徐州」「師出洛陽」など中国の地名がある
- ③ 銘文が七字句や四字句の韻文の型式をとり、しかもその内容が中国的な神仙思想に基づいている²

などとして、三角縁神獸鏡は魏鏡（魏で製作した鏡）だと推定した。これは言い方を変えると、

- ① 彼の名前は中国式だ。
- ② 彼のノートには中国の地名がある。
- ③ 彼の家には漢詩の本があり、中国式の神様が祀られている。

だから彼は中国で生まれた。

ということと同じ論法だ。そこにはとてつもなく大きな飛躍がある。富岡氏の指摘①②③は、金石学的研究から系譜論に導き、中国で製作された鏡だと言っている。もちろんこの時代に「系譜論」と「製作地論」という言葉があったとは思わないが、富岡氏の頭の中はこれを混同している。つまり、彼は系譜を明らかにすれば製作地が分かると考えていた。現代の考古学者の多くもそう考えているかもしれない。

小林行雄氏は、富岡氏の金石学的系譜論を踏襲するかたちで、論文の中では

この三角縁神獸鏡は、一般に魏晋代の鏡としてとりあつかわれているが、〈中略〉ここではそれをいちおう魏代の製品とし、それが輸入された時期は、邪馬台国の卑弥呼の景初三年(239)における魏への遣使の直後であろうと考えることにしたい³。

しかし、京都府（椿井）大塚山古墳から発見された三角縁神獸鏡をもって、邪馬台国の時代に輸入せられた魏の鏡であると解釈することは、かならずしもただちに学界一般の承認をうることのできるものではない。すなわち、そう解釈しうる可能性があるとはいっても、厳密には決定することのできない問題であるからである。しかも、その可能性についても、これを疑う所説がすでに発表されているからである⁴。

などとし、自ら三角縁神獸鏡の製作地論には踏み込むことはしなかった。ただ小林氏は、魏鏡という「前提」を掲げて「いちおう魏代の製品とし」た上で同範鏡論や伝世鏡論を展開したのである。こうした小林氏の研究態度について網干氏は次のように批判している⁵。

ある一つの仮説的な前提を想定し、さらにその前提の上に仮説を組み重ねて、一つの結論を導き出している。そして、その結論が事実のように理解される。若しその前提が、例えば最初の「そうであるとすれば」という前提が「そうでない」となればこの屋上屋を重ねた広遠な論理の結論は何も意味しないことになる場合もある。

網干氏の文章はとても平易で、分かりやすい。しかし、この文章を省み引用する考古学者を知らない。いったいどうしてなのだろう。

(2) 後藤守一氏の系譜論批判

2 近藤喬一が富岡説を抽出した。近藤喬一 1988 『三角縁神獸鏡』東京大学出版会、12頁

3 小林行雄 1961 『古墳時代の研究』青木書店 「第三章 同範鏡考」122頁

4 小林行雄 1961 『古墳時代の研究』青木書店 「第五章 前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二層」166頁

5 網干善教 1975 「三角縁神獸鏡についての二、三の問題－唐草文帯二神二獸鏡同型鏡に関連して－」『橿原考古学研究所論集 創立三十五周年記念』吉川弘文館

後藤氏の著書『漢式鏡』は、考古学的に正しい判断を含んでいるようだ。著書『漢式鏡』が世に出た20世紀の初め頃、「漢」とは古代中国を表し、「式」とはその「系統（譜）の」を意味していた。「漢式鏡」とは「中国系譜の鏡」という意味である。先に述べたように、古代日本に存在した鏡はその製作地に関わらずどれもが「漢式鏡」つまり中国系譜の鏡だからだ。

著書『漢式鏡』で後藤氏は、富岡氏の「仿製鏡」の判断を次の様にまとめ、続いて修正を図っている⁶。

富岡氏の最初に挙げた仿製鏡の有する特徴は、

(一)鏡背の文様表現の手法は、支那鏡の鋭利鮮明なるに対して、模造の当然の結果として、模糊となり、図像の如きは大に便化され、時に全く無義義のものとなり、線其他圓味を帯び来り、一見原型ならざるを認めらるること。

(二)支那鏡にありては、内句文様の分子が各々或る意味を有して配列せるを常とするに對し、摸仿と認めらるるものは一様に是れが文様化して、図様本来の意義を失へるものとなれること。

(三)本邦仿製と認めらるるものには、普通の支那鏡の主要部の一をなす銘文を欠く、図様中に銘帯あるものと雖も、彼の鏡に見る如き章句をなせるものなく、多くは文字に似て、而も字体をなさず、また当然文字あるべき位置に無意義なる圓、其の他の幾何学的文様を現はせること。

(四)支那の鏡にその存在を見聞せざる周圍に鈴を附せるものあること。

<中略>

富岡氏の挙げられた四点の中、第一は。梅原君も既に之を認められているが如くに、これを本邦仿製鏡のみの有する特徴と認めることはできない。否、本邦仿製鏡に於いても、直弧文鏡、盤龍鏡、T L V式鏡の二三のもの如き、更に細線鋸齒文鏡の如きに於いては、これと反対に鋭利・鮮明なる表現を見るのであるし、而してまた、支那鏡に於いても、其の全てが必ず鋭利・鮮明なものとする事も出来ない。恐らく所謂鋭利・鮮明をかき、図象の模糊たるは、鑄造術技の相異、合金の相異に因づくであらうから、これが日本内地にのみ局限し得られる特徴とすることは出来ない。第二、第三、また必しも、これが日本を除く他の支那周圍の地域に起り得ぬものとは断じ難い。<中略>これを日本内地仿製鏡とすることは出来ないと共に、これらの条件を有せざるものにも、本邦鑄造鏡たるを拒否するのは不可能である。

後藤氏は富岡氏の仿製鏡の判断基準が系譜論に過ぎず曖昧であると指摘している。後藤氏の指摘は明快であるが、近年の研究者はそれを無視してきた。

(3) 森浩一氏の分布論、王仲殊氏の分布論と系譜論

三角縁神獸鏡の国内産説は、森氏が分布論にもとづいて1962年次のように唱えた⁷。

小林氏が中国鏡だと推定している古墳出土の三角縁神獸鏡はすでに三百枚以上に達しているが、その大部分を魏鏡と断定することには賛成できない。魏鏡とできない理由は簡単であって、三角縁神獸鏡は中國大陸からかつて一枚も発見されていないからである。

<中略>

鏡製作も最初は帰化系工人によって主導的に行なわれたとみるべきであろう。とすれば、初期の仿製鏡である三角縁神獸鏡には簡単な中国文字が刻まれ、工人が二世、三世となるにつれ

6 後藤守一 1925『漢式鏡』雄山閣 878頁

7 森浩一 1962「日本の古代文化—古墳文化の成立と発展の諸問題」『古代史講座3 古代文明の形成』学生社 204～206頁

て甚しく誤記され（福岡県銚子塚）、やがて文字は文様化されたと考えられる。以上のように私は三角縁神獸鏡の大部分は仿製鏡であり、国内での鏡製作の当初には帰化系工人が製作を担当したから、三角縁神獸鏡に限らず一般に仿製鏡としては優秀なものを製作できたであろうと考えている。

さらに王仲殊氏は、1981年以降、その分布論とともに技術移転論を展開し国内産説を導いた⁸。

漢末から三国に黄河流域で流行していた前述の各種の銅鏡と、日本出土の三角縁神獸鏡とを比べてみると、両者の間には何ら共通するところがないことに、直ちに気付かれる。よって、三角縁神獸鏡は中国の魏鏡ではない——と断言できるのである。

いっぽう、長江流域で出土した呉鏡と、三角縁神獸鏡とを比較すると、むしろ類似するところが少なからずある。まず、呉の色々な平縁神獸鏡と比べると、内句の主文となっている神像と獸形が互いに似ている。つぎに、一連の画像鏡と比較すれば、断面が三角形になっている縁部、複線波文帯が二獣の鋸歯文帯の間に巡っている外区の装飾、これらが類似している。〈中略〉つまり、鏡の形式と文様からすれば、三角縁神獸鏡に含まれる素因は、中国の呉鏡にこそ備わっているものであり、よって三角縁神獸鏡は、呉鏡の範疇に属するものと言える。

こうして王仲殊氏は、呉の薄肉彫り技術が三角縁神獸鏡の神獸表現に用いられたという技術移転論を展開し、呉の工人渡来製作説を導きだした。

(4) 福永伸哉氏・森下章司氏、車崎正彦氏の三角縁神獸鏡系譜論

福永氏は三角縁神獸鏡の鈕孔と外周突線を取り上げて、鈕孔が四角形であることを「工人のクセ」とし、外周突線を「工人の流儀」と表現し⁹、その系譜の一端が河北の鏡工房にあると唱えた。鈕孔の長方形のかたちを「クセ」としたことは系譜論を語る上では正しい指摘と言えるが、外周突線は「流儀」ではなく「技術的要素」であるため系譜論には使えない。そのことについて鈴木は、次のように批判した¹⁰。

<外周突線について>

鋸歯文は、その底辺を挽き型で描いた後で残りの二辺をへら押しし、その内側を浚い取るという工程で作られている。そこで、私は粘土に鋸歯文を描いてみた。読者の方々には紙の上で鋸歯文を鉛筆で描いてみてほしい。底辺となる円周を描き、次に二辺を描く。そうしてみると、鋸歯文の高さが揃わないことが分かる（図1）。上方に線をあらかじめ描いておけば高さのそろった鋸歯文を描くことができる。これが外周突線である。図2の黒塚13号鏡には外周突線があるが、鋸歯文がそれをガイドとしていることが理解できよう。つまり、外周突線は、鋸歯文の高さを揃えるために無くてはならない「技術的要素」なのだ。しかし外周突線が無い三角縁神獸鏡もある。それらの場合どうやって鋸歯文の高さを揃えているのだろうか。それは三角縁（鑄型では幅の広い溝となる）の内側の境界線を鋸歯文の頂部としてへら押ししているのだ。鋸歯文のあるところの頂点の部分には外周突線か三角縁の溝が必ず存在する。つまり外周突線は「技術的要素」であると判断できる。そのため、「系譜関係の追跡には好都合だ」とする

8 王仲殊 1998『三角縁神獸鏡』学生社

9 福永伸哉 2001『邪馬台国から大和王権へ』大阪大学出版会 70頁

10 鈴木勉 2002「技術移転論で見る三角縁神獸鏡—長方形鈕孔、外周突線、立体表現、ヒビ、鑄肌—」『黒塚古墳から卑弥呼が見える』天理市教委

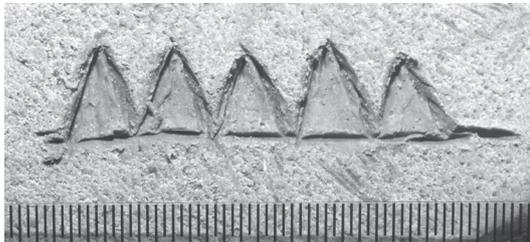


図1 再現実験で粘土にへら押しした鋸歯文



図2 黒塚13号鏡の鋸歯文(外周突線)

福永氏の判断は明らかな誤りである。

さらに福永氏は「銘文の共通性」として河北省易県で採集されたとする方格規矩鳥文鏡の銘文が全く同じであることを挙げているが、「同一の工人の作とまでは断定できないにしても、このような珍しい銘文が一致することは、工人同士がかなり近い関係にあったことをうかがわせるに十分である。」と自ら述べるように、これについては「系譜論」「技術移転論」として工人同士に繋がりがあることまでは推定しても良いだろう。しかし、それでは製作地論には辿り着けない。

さらに続く福永氏と森下氏の次の指摘は重要である¹¹。

「第三に、こうした鏡群と三角縁神獣鏡との関係について、燕下都鏡の「吾作甚獨奇」銘、長方形鈕孔などさらに両群をつなぐ要素が増えた点である。その一方、これらの魏晋鏡はいずれも線表現、面表現であり、浮き彫り風の表現を主体とする三角縁神獣鏡とは特徴を異にする。両者の製作につながりがあるとして、その間にはなんらかの「飛躍」を想定する必要がある。」

確かに、三角縁神獣鏡の浮き彫り（薄肉彫り）風の神獣像表現は呉の鏡の系譜の下にある。これを福永氏と森下氏は認めている。しかし、なぜこれを「飛躍」と表現せざるを得ないのだろうか。福永氏も森下氏も系譜論から製作地を割り出せると信じているからこそ「飛躍」だと言うのだ。これは、説明できない「断絶」が存在していることを言っていることになる。「飛躍」と表現せざるを得なかったことが、二人が系譜論では埋めきれない何かが存在していることを自覚していることを示している。

長方形鈕口は河北の鏡の系譜を示すものであっても三角縁神獣鏡の製作地を示すことはない。また、立体的な神獣像表現も呉の系譜を示すもので製作地を表すものではない。王仲殊氏がそれに分布論を加えて補強している点が福永氏と森下氏とは異なる点であるが、それでも両者の系譜論の方法では製作地に辿り着けない。

次に車崎氏は、次のように述べている¹²。

三角縁神獣鏡の系譜は何か。＜中略＞銘文の書式・書体、図紋の作風・癖、等々は、従来「仿製」とされた鏡を含めて倭鏡とは異質で、呉鏡ともつながる要素はほとんどない。しかし魏晋諸形式とは、共有する特徴をもっている。三角縁神獣鏡はすべて魏晋鏡と私が考える理由である。

11 福永伸哉・森下章司 2000 「河北省出土の魏晋鏡」『史林』史学研究会、137 頁

12 車崎正彦 2002 「三国鏡・三角縁神獣鏡」『考古学資料大観』第5巻、小学館

ここで車崎氏は系譜論から製作地を推定していると宣言している。先に挙げた後藤守一氏の著書『漢式鏡』の語から一步も踏み出してはいないのだ。系譜論だけでは決して製作地には辿り着けない。系譜論に留まっている考古学の方法こそが問題なのではないだろうか。

3. 製作地論

(1) 近藤喬一氏と岡村秀典氏の説にみる製作地論の重要性

近藤喬一氏は、三角縁神獸鏡研究について次の様に述べている。

「三角縁神獸鏡について研究している方は上にあげた方に限らない。また、視点も決して中国鏡か国産鏡かという問題に限ったものではない。むしろそういった問題は小さいことで、棚上げにして、古墳相互間の鏡の分有の問題や古墳の年代の問題こそが大事だ、という人もいる。しかし私はそうは思わない。中国鏡かどうかの問題こそ、弥生の終わりから古墳の初めにかけての東アジア世界のなかで、倭人たちの動きをどう捉えるかに深く関わりを持っていると考えるからだ¹³。」

全くその通りだと筆者も思う。仮説の上に仮説を重ねることは避けなければならない。「砂上の楼閣」の喩えは重い。これと似たことを岡村秀典氏は次のように述べている。

「しかし、三角縁神獸鏡が魏鏡であるのと日本製であるのとでは、その歴史的意義が全然ちがったものになってしまうことは十分に理解していただきたい。それを卑弥呼に下賜された魏鏡と認めるならば、その同範鏡の分有関係から邪馬台国の所在地が畿内に比定できるとする小林行雄氏の説がいよいよゆるぎないものになるだけではない。それ以上に、最初に注意したように三角縁神獸鏡が卑弥呼の銅鏡百枚に相当することが確実になり、邪馬台国が魏の冊封体制に編入されたと同時に、邪馬台国の側では魏の権威によって社会的矛盾を解消し、国内における覇権の強化を企図したことを示す物的証拠として三角縁神獸鏡を理解することができるからである。換言すれば、魏が卑弥呼にたいして「国中の人に示し、国家汝を哀れむを知らしむべき」と求めた政治的意図、あるいは古墳時代前期社会の支配構造を、日本列島の各地に配布された三角縁神獸鏡のなかに読みとることが可能となるのである¹⁴。」

岡村氏は、三角縁神獸鏡製作地論の重要性を説いているのである。系譜論ではない製作地論こそが日本の考古学にとって大切なのだ。それとともに、岡村氏は戦後の考古学の数々の業績が、三角縁神獸鏡魏鏡説の上に積み重ねられてきたことをも強調していて、氏の研究が三角縁神獸鏡魏鏡説の上に乗って進めてきたことも明らかにしている。救いは、製作地論の大切さを説いていることである。しかし、近藤氏も岡村氏も製作地論を展開する術を知らなかった。

(2) 新井宏氏と鈴木勉の製作地論

筆者は2015年5月に「三角縁神獸鏡の仕上げ加工痕と製作体制」¹⁵を、続いて2016年12月『三

13 近藤喬一 1998 「『黒塚古墳』の衝撃 三角縁神獸鏡の謎 第2回」『UP』309号、東京大学出版会

14 岡村秀典 1989 「五 副葬品は語る (一) 三角縁神獸鏡と伝世鏡」『古代を考える 古墳』白石太一郎編、156頁

15 鈴木勉 2015 「三角縁神獸鏡の仕上げ加工痕と製作体制」『河上邦彦古稀記念論集』

角縁神獸鏡・同範（型）鏡論の向こうに¹⁶」を著し、いわゆる三角縁神獸鏡の舶載鏡が出土古墳近くの工房で出吹き生産されたことを明らかにした。これは鏡背面の仕上げ加工痕が同範（型）鏡群の中では一致するものが少なく、同一古墳内出土鏡の間で一致することを突き止めた上での論考であった。さらに鏡背面の仕上げ加工が、鑄上りの悪い鏡に対して行われていることから、仕上げ加工が鑄造集団の判断によって行われたことを明らかにしたのである。つまり、三角縁神獸鏡は国内の出土遺跡近くにおいて製作されたことが分かった。さらに、その工人らの本貫地の一つの候補として大和盆地内を想定することができた。

鈴木の発表の8年前、新井氏は、鉛同位体比から三角縁神獸鏡国内産説を発表していた。著書¹⁷（以下、新井本）において

「いわゆる舶載鏡について、同型鏡・同範鏡の相互間の関係を計算してみると状況は大きく異なっていた。すなわち三十二件の事例の内、0.12パーセント¹⁸を超える例が二十四件もあり、同時に製作したとは考えがたいものが大半だったのである。〈中略〉想定される原因は、舶載鏡の同型鏡・同範鏡の中には、異なった時期あるいは異なった場所で作られたものがあるということである。〈中略〉その一方で、舶載鏡や仿製鏡を問わず、「他人の空似」を探すと、奇妙なことに同一遺跡に副葬された鏡に極めてよく似た鉛同位体比を示すものがあるのである。〈中略〉これを単なる偶然であると排除してしまうにはまことに奇妙な現象である。やはり、それらが同時に複製等の方法で作られた可能性を探ってみる必要があろう。〈中略〉必要に応じて、現地で製作された可能性があったのではなかろうか。」

と述べる。これは鈴木三角縁神獸鏡出吹き説とほとんど同じ結論と言える。実は鈴木は論文執筆の時点で新井本を読んでいなかった。『三角縁神獸鏡 同範（型）鏡の向こうに』を刊行後、読者の方の指摘から新井氏が鈴木とほぼ同じ結論を得ているとの情報を得て、改めて手元にあった新井本を読んだという次第である。その内容の適格なことに驚きを感じた。なぜ鈴木は新井本を読まなかったのか。それは鉛同位体比に対する精度的な疑問を持っていたからである。

新井本の45頁に鉛同位体比の類似指数の説明がある。

「まず論文では、鉛同位体比の相互間の類似性を図11に示すような鉛同位体比類似指数として定義している。一般的には鉛同位体比分析結果は鉛二〇八と鉛二〇六の比、鉛二〇七と鉛二〇六の比、鉛二〇七と鉛二〇四の比、鉛二〇六と鉛二〇四の比で示されているが、それぞれを、鉛二〇四、鉛二〇六、鉛二〇七、鉛二〇八のパーセントとして計算し直してから、各成分の差を相対値として出し、その絶対値を平均したものを類似指数としたのである。類似指数がゼロに近ければよく似ているということである。指数判定のようなものだ。

このように定義した類似指数が、まず同一鏡中でどうなっているかを調べてみると、その事例は二七件あり、その内の二十件までが、0.05パーセント以下に入っており、最大でも0.09パーセント以下であった。また、同時に鑄造したと推定される同型鏡・同範鏡としては仿製三角縁神獸鏡に四組、平原弥生古墳の大型仿製鏡に五面（組み合わせとしては十組）あるが、十四組中の十二組までが0.12パーセント以下であった。」

16 鈴木勉 2016『三角縁神獸鏡・同範（型）鏡論の向こうに』雄山閣

17 新井宏 2007『理系の視点から見た「考古学」の論争点』大和書房、45頁、77頁

18 新井宏説の「類似指数」を指す。

と説明するが、その元データは元原稿である『情報考古学』所載の新井論文¹⁹に示されており、それからすると元データは小数点以下四桁まで表記されており、類似指数(%)が下三桁まで表記されている。また、同一鏡内の鉛同位体比類似指数の表記により同一材内の類似指数のばらつきは69%が0.05%以内に入り、最大でも0.89%となっており、一定の信頼度はあると考えられる。また、肝心の元データの信頼性については、計測機器の計測精度と計測者(馬淵、平尾ら)に左右される。とはいえ、現段階では新井説が鈴木説と同様の結論を得た時点で一定以上の高い信頼性があると認識することとなった。

かつて森下章司氏から手紙をいただき、新説には「対照できる他の要素」が必要との指摘をいただいたことがある。考古学ではよく言われることであるが、それは考古学が型式学に基づく分類から始まることが多いことから推奨されている研究方法と言える。型式学的分類は歴史学にとって最も大切な時間の概念が元々付与されない項目によって分類が始まるため、その分類から推定される時系列について本当に意味ある推論なのか否かについて、全く異なる分野、異なる立場からの研究によって試されなければならないということになる。言い換えれば型式学的分類は時系列の点では常に修正されることが前提となっているということである。型式学的分類を単独でその基礎とした系譜論は、単独ではそもそも信頼性に欠けるのである。そのため、型式学的分類は、「実証」の手段とはなり得ない。そのために「対照できる他の要素」が必要であり、それによって少しずつ精度を高めていくことになる。型式学を学ぶ者は、型式学がどこまで行っても「実証」の域には達しないことを肝に銘ずべきである。一方、加工痕は「事実」であり、そこから導いた製作地論は単独で「実証」の力を持つ。であるから、型式学と同じような「対照できる他の要素」は無用なのだ。それでも、この度の結論は、新井氏説と鈴木説にとって、図らずもお互いに「対照できる他の要素」となっており、学説的には互いに比較する必要はないが、一般論として両説は大いに補強されたともいうことができる。考古学界は型式学の功罪をよく吟味すべきである。

4. 型式学の運用方法に対する疑問

(1) 考古学は型式学か？

鈴木製作地論によって、三角縁神獣鏡が国内で製作されたことは「実証」出来たと考えている。これまでの三角縁神獣鏡研究の多くが、型式学的分類から系譜論を展開するものが中心で一向に製作地に辿り着かなかったのは、ひとえに考古学者たちが型式学に偏って研究を進めたからと断言できる。

東京大学で長く教鞭を執った藤本強氏は、著書²⁰の中で、考古学の方法論の多様性について、層位学、分布論、技術史学、型式学、自然科学と多岐に亘り、それらの相互補完によって学問的精度を高めていくものだとしている。

ところが近年の考古学者たちの中には、「考古学はすなわち型式学だ」と言い切り、「型式学だけで考古学が成り立つ」と考えている人がいる。これは考古学の分野の教育の罪であろう。おそらくは都出比呂志氏が「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱—」²¹を著した1991年以降、考古学界では、三角縁神獣鏡魏鏡説が一般化し、教員・先輩らの口から幾度となく語られたのであろう。「前方後円墳体制論」は日本の古墳時代研究の一時代を築いたとも言えるのかもしれない。

19 新井宏 2005 「鉛同位体比から見た三角縁神獣鏡の製作地—舶載紀年鏡等の複製問題を通して—」『情報考古学』11-2

20 藤本強 1994 「研究方法のいろいろ」『増補 考古学を考える』雄山閣

21 都出比呂志 1991 「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱—」『日本史研究』343

しかし、いま三角縁神獸鏡国内産出吹き説が実証され、考古学はこれで良いのか？という疑問が出てくる。

そもそも三角縁神獸鏡魏鏡説は小林行雄氏によって強く語られたのであるが、氏の論考には次のように書かれていた。

「この三角縁神獸鏡は、一般に魏晋代の鏡としてとりあつかわれているが、〈中略〉ここではそれをいちおう魏代の製品とし、それが輸入された時期は、邪馬台国の卑弥呼の景初三年(239)における魏への遣使の直後であろうと考えることにしたい」

つまり、小林氏は三角縁神獸鏡の製作地を中国と仮定したことを明言した上で、論を進めたのである。小林氏の論は、そのほとんどが「型式学的分類」によって行われ、その後の考古学研究者の模範とされた。鏡研究では岸本直文氏²²や新納泉氏²³の「型式学的分類」などが小林氏説を踏襲するように論を重ねた。彼らは、小林氏が前段に述べた「ここではそれを魏代の製品とし」という仮説であるという前提を忘れたかのように論を積み重ねたのである。彼らは、「同範(型)鏡群は、同一工房で作られた」との前提を信じて型式学的分類を行ったのだ。鈴木が明らかにしたように、鏡式や型式を異にする鏡群が一括して古墳近くの工房で作られたことから、小林氏、岸本氏、新納氏らの型式学的分類に根本的な疑義が生じた。小林氏の型式学的分類にどのような意味があるのだろうか。岸本氏の、新納氏の分類は一体どのような意味を持つのであろうか。

さらにこの型式学的分類の方法は、古墳時代の他の金属器研究にも用いられ、5、6世紀の象嵌遺物研究、装飾大刀研究、甲冑研究などなど、古墳時代の遺物はことごとく王権による製作・下賜を基軸とし、「王権論」の一部として語られるようになった。

いま、こうして三角縁神獸鏡の国内産出吹き説が明らかとなり、戦後の考古学界が進めてきた型式学とは一体何だったのか、改めて問わなければならない。

近藤氏と岡村氏が三角縁神獸鏡製作地研究の大切さについて強調したように、三角縁神獸鏡国内産出吹き製作説は、単なる一学説の転換に留まるものではない。戦後の考古学界のあり方自体を問わなければならないという前代未聞の大きな課題を突きつけている。

(2) 鏡研究者と一般考古学者の認識の違い

ここで改めて問題として提起したいことがある。かつて、三角縁神獸鏡研究についてまとめた岸本直文氏は、自身が魏鏡説を採る立場であることを明言しつつ、製作地論は決着していないと明言した²⁴。先に述べたように魏鏡説を採る近藤氏も岡村氏も製作地論は決着していないとした。森下氏は魏鏡説、列島内製作説のどちらにも拠らず三角縁神獸鏡研究について論考をまとめている²⁵。岩本崇氏は、魏鏡説の立場を取りながらも「三角縁神獸鏡の製作を日本列島のなかに求めることは、やや困難と言わざるをえないのである。」とあくまで遠慮がちな表現にとどめている²⁶。辻田淳一郎氏は、三角縁神獸鏡の製作地については論究せずその系譜だけを追う²⁷。彼らは皆第一線の三角縁神獸鏡研究者である。

22 岸本直文 1989 「三角縁神獸鏡製作の工人群」『史林』72-5

23 新納泉 1991 「第4節 権現山鏡群の型式学的位置」『権現山51号墳』権現山51号墳刊行会

24 岸本直文 1993 「三角縁神獸鏡研究の現状」『季刊考古学』43号

25 森下章司 2005 「三角縁神獸鏡と前方後円墳成立論」『季刊考古学』90号

26 岩本崇 2013 「三角縁神獸鏡の分布が示すヤマト王権と西日本の勢力関係」『歴史読本』2013年12月号

27 辻田淳一郎 2008 「三角縁盤龍鏡の系譜」『九州と東アジアの考古学—九州大学考古学研究室50周年記念論文集』

ところが、彼ら以外の最近の鏡研究者の多くが、魏鏡説を前提として自身の論を展開する。例を挙げれば枚挙にいとまがない状態で、鏡研究ばかりでなく、現在の前期古墳時代研究の多くが三角縁神獣鏡魏鏡説を前提として語られ、同様に中期、後期古墳時代の金工品の論文もその前提で語られ、大和王権製作・下賜説がその多数を占めている。

さらに、驚くのは、日本各地の埋蔵文化財施設や博物館の解説や各種報告書である。例えば、群馬県埋蔵文化財調査事業団のホームページには、

三国時代の魏から邪馬台国にもたらされた鏡と考えられており、〈中略〉これらの鏡は、ヤマト政権との政治的関係を深めた各地の首長に、政権から下賜されたものと考えられている。

静岡県菊川市埋蔵文化財センターのホームページには

この銅鏡は中国で作られたと考えられ、同じ鋳型で作られた鏡が京都府、岡山県、三重県で見つまっていることから、上平川大塚1号墳に葬られた人物と畿内王権とのつながりを示すものとしてたいへん貴重な遺物です。

福岡市埋蔵文化財センターのホームページには

三角縁二神二車馬鏡は三角縁神獣鏡の一種で、内区に神像2体と4頭立ての馬車2台を描いています。化学分析（鉛同位体比分析）の結果、この鏡の原料の鉛は中国産であり、中国でつくられた舶載鏡であることがわかっています。

などと解説されている。

このように、三角縁神獣鏡研究を専門とする人のほとんどが、製作地論には決着がついていないとしていたのにも関わらず、その周辺の鏡研究者と文化財機関は「魏鏡」であると断言するということが繰り返されている。実に無責任と言わざるを得ない。

日本考古学の基礎となったこれらの論考を土台とした数々の金工品に関する型式学的分類と論考にどのような意味があるのだろうか。改めて問いたいと思う。